



信州大学 経済学部同窓会報

第 3 号

発行者 信州大学経済学部同窓会
同窓会事務局 〒390-8621
長野県松本市旭3-1-1
信州大学経済学部内
TEL・FAX 0263-37-2309

平成18年12月10日発行

E-mail : dousou@econ.shinshu-u.ac.jp
URL : http://www.econ.shinshu-u.ac.jp/index.html

社会人大学院特集

大学院地域社会 イニシヤティブ コースについて

大学院経済・社会政策科学専攻運営委員長
村上 範明

信州大学経済学部の大学院（正確には大学院経済・社会政策科学研究科）には地域社会イニシヤティブコースというものがある。定員は六人。こじんまりしたコースである。しかし、これに関わる教員数は二十人以上、丁寧な個人指導を含むカリキュラムが特徴である。

実は本当の特徴はそこにはない。カリキュラムの中身を仔細に見ると、このコースがたいへん個性的なコースであることが分かってもらえる。まず、教育対象を社会人とした。そのため授業も平日夜間および土曜午後開講を基本とした。その社会人対象に、彼らが職場でいま抱えている問題や、住んでいる地域社会で生起している問題について考えるカリキュラムが組まれている。それも教員が一方通行的に開設する形式の授業だけではない。むしろ、教育の中心は社会人である院生間の議論の積み重ねや相互批判の蓄積にある。院生のみならずそれぞれ数年から数十年の社会人経験をお

持ちである。この人たちが議論するから、ときどき熱を帯びて激しいものになることもある。しかしそういう過程を経て力がついていく。

教室で議論しているばかりではない。職場や地域で起きている問題に取り組み能力を磨くには、現場に赴いて、実際にそこで似た問題に取り組んでいる人たちから学び、議論することが必須である。ということ、現場に赴くフィールドスタディを重視したカリキュラムになっている。

こうして科目の履修を重ねていくのと並行して進む作業が修士論文の作成である。地域社会イニシヤティブコースという大学院の最終的な目標は、この修士論文の作成である。我々はこの論文を特定課題研究論文と呼んでいる。修士論文とは呼ばないのはなぜかというと、この論文は学問体系に新しいものを何かしら加えるということをめざしていないからである。そうではなく、地域社会の抱える問題の解決をめざした実践的な提案をめざしている。この論文によって地域社会の抱える問題の解決に向けて何らかの光が当たることをめざしている。

信州大学経済学部の卒業生のみなさんはすでに何らかの社会経験を積まれていると思う。そ

うした中で課題も抱え、それを何とかしたいとお思いかもしれない。時間と費用が許せば地域社会イニシヤティブコースで学びませんか。現に、来年の春にはお一人、さる市役所にお勤めの卒業生の入学が内定しています。みなさんのご応募をお待ちしています。

経営大学院の提供する付加価値

経営大学院助教授
牧田 幸裕

経営大学院は二〇〇三年四月に設立された。その狙いは以下のとおりである。

「企業経営者や理工系技術者で研究開発プロジェクト・リーダーとして現に活躍している者、ないしそれを目指す者、起業をねらう者を対象とし、技術と経営の両面にわたるセンスと専門知識をそなえた人材の育成を図る」。(イノベーション・マネジメント専攻の設置に当たって 鈴木智弘)

多くの市場が成長期から成熟期へと移行する中で、単純に「ものづくり」をすれば製品が売れるという時代は過ぎ去った。市場の成長は緩やかになり、その中で多くの企業によって市場のパイの熾烈な獲得争いが行われている。企業は顧客ニーズの把握に心血を注ぎ、細分化されたニーズに対応する製品を次から次へと出していく。その結果、

顧客はさらにわがままになり、ピンポイントで自分のニーズに答える製品でないとは購買しなくなる。だから、企業はさらに顧客ニーズの把握に躍起になる。これが、ここ最近のマーケティングブームの原因のひとつであった。

これからの企業の競争優位性を考えると、上記の対応でも足りない。なぜならば、技術革新により市場や顧客ニーズはいつも簡単に変化するからだ。

「今ある技術がこれからの市場をどう変えていくのか」、逆に、「市場の変化はこうなる。だから、このような技術が必要とされる」という視点を持って、未来を予測し対応できなければ、企業の競争優位性を維持することはできない。

今、多くの大手製造業の企業が、R&D部門とマーケティング（または営業、経営企画）部門の融合を図ろうとしている。経営企画やマーケティング部門が、今後の市場の変化を予測し、それに伴い、R&D部門で要素技術の研究優先順位が決められ、または、商品化の開発優先順位が決定される。市場の変化を敏感に察知し、変化に同じ製品を出していくことが、競争上の優劣を決定する。

ただし、この融合はそう簡単には機能しない。経営企画を営業としてきた、または、マーケティングを生業としてきた人が、R&D部門の人から要素技術の話も聞いても、それは「宇宙語

だからだ。同様に、R&D部門の非常に狭い分野で深く研究を続けてきた人が、いきなり「市場変化は…」といわれたところで、これも何を言っているのか理解できない状態となる。

多くの大手製造業の企業は、お題目としてR&D部門とマーケティング（または営業、経営企画）部門の融合を謳っているが、それを機能させるのに相当苦勞している。

この問題を解決するには、以下の3のステップの進展が必要である。

1 R&D部門の人が、経営企画やマーケティングの話も聞いても、毛嫌いし拒否しない。逆に経営企画やマーケティング部門の人が、技術のテクニカルな話を聞いても毛嫌いし拒否しない。

2 R&D部門の人が、経営企画やマーケティングの話聞き、なんとなく面白そうだ。役に立ちそうだと考え始める。逆もまた然り。

3 経営企画やマーケティングの結果を基に、R&D戦略を策定できる、技術の進化の方向性を基に経営戦略、マーケティング戦略を策定できる。

最終的に3のステップに至るのが望ましいのは当然だが、1、2のプロセスを実現するには、まず最初に「プロトコルの融合」が必要である。

お互いが相手の言語を理解し、その結果、相手の考えを理解し、協働の仕組みを作り上げられる

ようにする融合である。そのため、経営大学院では「本学の技術系教育研究資源と経営・経済系の教育研究資源の融合による教育を行うことにした」。(前出 鈴木智弘)

経営大学院が学生に提供する付加価値の重要な要素のひとつは、この「プロトコルの融合」である。私自身も考えている。では、「プロトコルの融合」さえ図られれば、上記の3ステップは機能するのか。私はそうは考えない。

「プロトコルの融合」により共通言語が醸成される。それにより、相手の考えを理解できるようになる。しかし、協働するには相手の考えが「腑に落ちる」必要がある。相手の考えが「腑に落ちる」ためには、

1 相手が自分にわかりやすく説得力を持って話をしてくれる。

2 自分自身が先入観や予見を排除し、頭をやらわらかくして話を聞くことができる。

という2つの条件が必要となる。このいずれの条件も満たすことがなければ、いくらコミュニケーションを図っても、相手の考え方を拒否し協働は難しいだろう。

では、上記2条件を満たすためには何が必要なのか。

1 相手に対し、わかりやすく説得力を持って話をする。わかりやすく話をするには、いくつものやり方があるが、ひとつが論理的に因果関係を明

確にして話をするのである。そして、相手の聞いていること、相手の求めていることをしっかりと意識し、それに答えようと話をするのである。相手の聞いていることに答えず、自分で好き勝手に話をするのは、自己満足でありコミュニケーションではない。

これは、ロジカル・シンキング、ロジカル・コミュニケーションを習得することが解決の出発点となる。

説得力を持つためには、2つの方法がある。ひとつは「経験則を根拠にすること」、もうひとつは「客観的事実を根拠にすること」だ。

長年ビジネスの経験を持つていると、問題に直面した際に過去の経験を活かすことができる。これまで同様の問題をこのように解決し成功してきた。だから、今回もこれまでと同様に解決することで成功するはずだ、というロジックだ。

一方、客観的事実を基に因果関係を明確にし、説得力を高めることもできる。複数の客観的事実から因果関係を持つて結論を出す。所謂、帰納法の考え方で説得力を出す方法だ。

ここで重要なのは、「経験則を根拠にすること」「客観的事実を根拠にすること」の両方できないと説得力はないということだ。

経験則だけ語っていても、相手がその経験を共有できないと共感できず説得力を持たない。

客観的事実だけで机上の空論を唱えていても、現場感がなく信用に値しない。

そこで、TPOに応じ経験則を活用し、または客観的事実を活用し説得力を高めていくことが求められる。

2 先入観や予見を排除し、頭をやらわらかくする。

これは自助努力では解決できない。自分で自分が先入観を持っている、予見を持っていると意識し排除できる人はなかなかいないからだ。先入観や予見を排除するためには、ゼロベース思考が必要となる。

ゼロベースで考えるためには、これまでの常識や制約条件を取っ払うような環境を作り上げなければならぬ。それにはいくつかの方法がある。

ひとつの方法は、異業種の人と交流し、または、全然年齢が違ふ人と交流し、自分の常識が世の中では常識ではないと知る機会を設けることだ。もうひとつの方法は、ゼロベース思考が身につけている人からトレーニングを受け、自分の思考の幅の狭さを思い知ることだ。そのような機会をできる限り多く持つことで、次第にゼロベース思考が身につけてくる。

経営大学院では、「プロトコルの融合」を図る前段階として、このような「コミュニケーションの基礎・考え方の基礎」を提示しようと考えている。

ここでは、徹底的にロジカル・シンキング、ロジカル・コ

ミュニケーションが求められる。曖昧な論理、根拠はすべて否定され、問題を構造的に把握し解決策を策定する力が求められる。経験則だけによる根拠も否定され、論理だけの机上の空論も否定される。

この「コミュニケーションの基礎・考え方の基礎」を学ぶ苦しいプロセスを経ることにより、その結果、

1 相手に対してわかりやすく説得力を持って話をする

2 先入観や予見を排除し、頭をやらわらかくする。

また、経営大学院では、さまざまなバックグラウンドを持った学生が集まっている。ビジネス経験を数十年持つている人、学部を卒業しそのまま大学院へ入学する人、R&Dの経験を持つ人、マーケティングの経験を持つ人、経営の経験を持つ人、さまざまだ。

そのようなさまざまなバックグラウンドをもった人たちが、一緒に同じ問題を解決しようとする。お互いが自分の先入観や予見に気づき、それを排除する機会を持つことができる。従って、経営大学院に入学する人が経営大学院で学ぶ数年間を最大限活かすためには、以下の2つの力が必要となる。

1 これまでの自己のビジネスの経験をゼロ・クリアし、真綿が水を吸い込むように新たな知識を吸収し、柔軟に物事を考えられる「柔軟力」。

2 「柔考力」をもって、これまでの自己のビジネスの経験を整理し、次のステップを考えられる「構想力」。

この2つの力を自分自身で身につけ経営大学院で学ぶことができれば、ビジネスの最前線で活躍する上で必要となる知識の基礎、考え方の基礎はしっかりとってくる。基礎をしっかりとさせた上で、経営大学院を卒業し、ビジネスの最前線に舞い戻ったとき、卒業生は自身の「Before-After」をしっかりと実感できることだろう。

経営大学院では、今後もビジネスの最前線で付加価値を創出できる「真のビジネス・パーソン」を輩出していきたいと考えている。

地域社会イニシアティブコースで学ぼうとする皆様へ

手島 康二
(平成17年3月修了生)

平成十五年度よりスタートした信州大学大学院／経済・社会政策科学研究科の一コースである「地域社会イニシアティブ」は、主に社会人を中心としながら、その名の通り、経済学や地域社会に関連する諸問題を研究する場であると言えるでしょう。私はその第一期生として平成十七年三月にこのコースを修了しましたが、在学中の2年間を振り返った時に、強く思うところ

があります。

それは、この地域社会イニシアティブコースで学ぼうとする者が、先ず大前提として行なっておかなければならない作業は、入学試験時の小論文作成や質問攻めの面接をいかにしてクリアするかというノウハウを身に付ける事などではなく、地域社会や会社組織などの中に於いて、社会人としての自分がそれらで「どんな事象に対して」「如何なる問題意識を持って」「悩み、考え、主張し、時には挫折も、答えを求めて来たかを、改めて明らかにしておく作業なのだという事です。

本コースに限らず、大学院は基本的に学生が自ら学ぼうとする場でありますから、「とりあえず入学して学費を納め」「先生方から高度な内容の学問を教えていただく」という、受身の姿勢を持った学生は存在しないようです。よって、殊に本コースに限って言えば、入学して来る者皆が、前述のごとく「問題意識」を抱えながら、その問題解決への糸口を見出すべく、「積極的に飛び込んで来た」「結果として、言わば自然発生的な「意志」の集団として成立した大学院なのではないかと考える次第です。

例えば、「地域の政治文化」という題目の講義中に、幕末から維新にかけて日本を動かした、名を挙げてもわずか数百名足らずの青年達の強大な意志力・創造力について、熱く解説を始め

る学生がいる。そして「公共政策の経済分析」の講義では、ノートの需要曲線と眺み合いながら、ミクロ経済学の片鱗を否応なく覗かされつつ、限界代替率や意思決定の理論について考えたりする。また、「地域の少子高齢化と生活福祉」などの講義に於いては、問題点の要因や対策を巡る意見交換のセッションから、ジェンダー問題に関する討議へと進展してしまったりする。

たしかに、こうして大学院で学ぶ講義の内容は、かけがえのない学びの経験、と言えるでしょう。しかし一方では、そうした自律的な研究体験を積み重ねて、大学院生としての所定の年数を終え、最終的に修士論文を提出することだけが、真に地域社会イニシアティブコースの学生に求められる課題であるかと言うと、私は決してそれが全てだとは考えておりません。企業や自治体など実社会の中で学んで来た社会人が、再度「学生」という立場で学ぶことの意味は、この辺りに見出すことが出来るように思えてならないのです。

要は、本コースの修了生は、再び元の「職場」に「戻る」わけであり、そこで発揮される力は、大学院で取得した学位以前に、蓄積された経験と上積みされた体験に基づいて、問題解決能力として評価されて行く類のものでなければならず、事実ここまで四期に渡る本コースの修

了生と在學生は、今そのことを体現化しつつあると実感しております。

百聞は一見にしかず。あなたも地域社会イニシアティブコースのドアを叩いて下さい。

社会人大学院イノベーション・マネジメント専攻を修了して

高橋 学
(平成18年3月修了生)

昭和六十二年四月から平成三年三月まで信州大学経済学部で学生生活を送った。時はバブルど真ん中、世の中景気のいい話ばかり。自分の就職活動に入るまでスキーと遊びとアルバイトに明け暮れる毎日。今考えると勉強など殆どしなかったように思える。そんな自分にも唯一自信をもって勉強したと言えるのが高梨ゼミでの勉強である。先生からうけた指導で最も強く影響を受けたことは「実際の現場をよく見る」ということである。

平成三年四月、港区に本社を置く建設会社に入社した。日常業務でもつねに心がけていたことは「現場をよく見る」こと。日常業務のあるところすべて「現場」である。入社して八年後、次のステップに進むため転職し会計事務所勤務する事になった。

会計事務所の現場とは、大きく税務・会計業務と経営支援業務である。更に、クライアント

の「現場」を理解する必要がある。前職や会計事務所で積んだ経験は、経営支援業務に携わる上で大いに役立っている。

しかし、クライアントが抱える問題・課題の中には今までの経験だけでは到底太刀打ちできないものが存在する。クライアントの「現場」ごとに多種多様な問題や課題が存在し、その問題・課題の数だけ答えがあると、言っても過言ではない。例えば、マーケティングや生産管理、技術開発等は私にとって未知の世界である。

自分の未熟さを痛感していたある日、日経新聞を読んでいると信州大学大学院学生募集の記事が突然目に飛び込んできた。早速資料を取り寄せた。信州大学経済学部が工学部と連携し、技術のわかる経営者、経営のわかる技術者を養成するために設けた経営大学院だという。「ここなら自分に不足するマーケティングも、生産管理も、技術開発も勉強できる」と思い、何のためらいもなく願書を出した。大学院の講義は、経営戦略論、経営組織論、マーケティング論、統計学、技術開発論、技術開発実習、特許戦略論などなど幅広い。講師陣も大学院の教授のほか、企業やコンサルティンングファームのトップや他大学の教授など、バラエティに富む。受講者もメーカーや卸・小売業、金融、専門サービス業といったいろいろな業界から、経営者や

中間管理職、技術者や内勤スタッフまで多種多様な面々がいる。講義は一方的に話を聴くスタイルではなくテーマをもとに受講者が議論する形態が中心である。だから、同じ講義であっても受講するメンバーが変われば議論の内容も変わる。前年受講した同じ講義を翌年度もう一度受講しても全く違う展開があり、非常に刺激的だ。

講義ばかりでなく実習や視察もある。私は日本国内の企業のみならずアメリカ、イタリア、デンマークの海外視察に参加する機会を得た。

そして、大学院のメインディッシュはなんとと言っても課題研究である。当初の目的どおりマーケティング論の教鞭を取る茂木教授の指導を仰ぐ事ができた。

指導日の前は準備に必死。教官の厳しい突っ込み必至。当日やっぱり厳しい突っ込みで失神毎回指導記録をつけ何度も何度も読み返した。自分の視点に欠けるもの、検討の不足するところ、論旨をぼかす不要な記述など、指導のたびに研究の進捗が実感できた。

大学院には求めていたものがあつた。確かに、日常業務をこなしながら講義に出席し、課題を提出し、修士論文を書き上げることが簡単なことではなかったが。

今、私は会計事務所勤務を続けている。しかし今の私は三年前の私ではない。自分の力不

足に失意を感じ、答えが見つからないと嘆くことはない。「力がついた」とか「答えがわかるようになった」わけではない。大学院である事を学んだからである。「答えは探すものではなく創り出すもの」。講義や視察でお会いした経営者の方々は日々答えを創り出す努力をされている。これが「イノベーション」

卒業生による講義 現代の産業・社会事情

教育企画委員会・交流系科目部会
kouyuu@econ.shinshu-u.ac.jp

金 早雪

卒業生の（厳密には同窓会員の）皆さん、こんにちは。前号でお知らせしましたように、卒業生による講義「現代の産業・社会事情」が、一昨年の「臨時休業」で英気を養って昨年からは六月から八月までの変則的日程でしたが、七人の担当者いづれも、本当に心のこもった語りかけをして下さいました。感謝あるのみです。

アンケート結果でも、卒業生の皆さんの生の声はとても有益だと、大好評です。学生の不満は、日程、時間配分、施設と、すべて裏方にまつわるものです。実際、担当下さった方々始め、突然の依頼を差し上げた同窓会関係各位などにも、世間知らず

なのだ。クライアアントの「現場」ごとに生ずる多種多様な問題や課題の数だけ答えを創る。なんと楽しい事ではないか。大学院でお世話になった先生方、ともに励ましあつた仲間たちには心から感謝するとともにこれからも末永いお付き合いをお願いするばかりである。

の教員の段取りの悪さなどからご迷惑をおかけしたものと、冷や汗たらたら、ここにお詫びを致します。

学生たちは講師の皆さんが「コミュニケーション能力」に言及されたことに強く印象づけられたそうです。そのわりに、講義のあとレスポンス・シート（和名、通信録）を出すときに挨拶のひとつでもしてくれただけは、わがゼミの留學生だけでしたが、これは悲しいかな、学生との年齢差（によるお説教がましき）が、当方を（いっそう？）とっつき難い存在たらしめているからかもしれません。学生の幼稚化が目立つのも、そのせいかもしれません。

実際、素直な学生気質は今も変わりません。学生をもっとインターンシップなどに押し出して、それもOB・OG各位のご指導を仰ぐような機会があれば

よいのかもしれませんが。今も昔も、とりわけ就職戦線など、時代の波に逆らうことあたわず、大学もしかりながら、目先の浮薄な時流に流されまいと踏ん張ってまいります。折々に叱咤激励を賜りますように。さしあたり、担当候補の自薦・他薦や勤務先でのインターンシップ受け入れなど耳寄り情報がありましたら、上記あてご一報頂戴できれば幸甚です。最後に、担当者と支援下さつた同窓会関係各位には再度、深く感謝申し上げます。



経済学部同窓会理事会報告

日時：平成18年11月3日（金）

午後1時より

場所：信州大学経済学部

研究会室

- 1 開会（樋口教授）
- 2 同窓会長挨拶（矢口会長）
- 3 報告事項

- (1) 18年度同窓会活動報告について

- ・前理事会以降の活動内容について矢口会長より行う。
- (2) 信州大学同窓会連合会について
- ・第四回の同窓会連合会役員

会の内容報告を矢口会長より行う。

- (3) 信州大学東京同窓会について

・平成19年2月3日（土）午後3時より、アルカディア市ヶ谷で開催される予定の東京同窓会について、同窓会会報を通じて、同窓会会員へ参加を呼びかける事を再確認。

- ◎会則に従い、矢口会長を議長に以下について協議。
- 4 協議事項

平成18(2006)年度 担当講師一覧（敬称略）

氏名	入学年	勤務先
手塚 伸	1978	山梨県庁
西田 貴一郎	1987	(株)リクルートHPマーケティング
藤井 秀康	1987	東洋計器株式会社
呂 雅恵	1987	(株)ケレスインターナショナル
田口 理絵	1988	大宮税務署
山下 勇次	2000	(株)ぎょうせい
南 保圭	2004	日本銀行

- (1) 経済学部との情報交換協定について
 - ・事務局作成の素案を協議。語句等細部の変更は会長一人とする事を含め、内容を承認。
- (2) 同窓会活性化策について
 - ① 同窓会報について
 - ・第四号（19年6月発行予定）の内容について協議。
 - ・今後も内容充実に向け検討していく事を確認。
 - ② 同窓会総会の開催方法について
 - ・毎年11月3日に同窓会総会を開催する事を再確認。
 - ・開催場所を東京、名古屋、大阪といった場所で開催する事などについて協議。
 - ・今後もより多くの同窓会員が参集しやすい開催方法を検討していく事を確認。
 - ③ 経済学部創立30周年記念行事について
 - ・平成21年に学部創設30周年を迎えるにあたり、学部で検討する記念行事へ同窓会としても参画することを確認。
 - ・今後、具体的な動きが見えた段階で再協議する事を確認。
 - ④ 同窓会支部活動について
 - ・支部組織の重要性を確認。現在のゼミ単位、地域単位等で開催している活動状況の把握に努め、活動助成制度創設なども含め、今後検討をしていく事を

- 確認。
 - (3) 同窓会総会について
 - ・協議内容ならびに役割分担について確認。
 - (4) 信州大学教育改善のための卒業生アンケートについて
 - ・信州大学の今後の教育の充実、改善を図るべく、同窓会会員向けにアンケートを実施する事に關し、経済学部より協力要請があり、協

経済学部同窓会総会報告

- 日時：平成18年11月3日（金）
午後3時より
- 場所：信州大学経済学部 研究会室
- 1 開会（大槻副会長）
- 2 会長挨拶（矢口会長）
- 3 名誉会長挨拶（柴田経済学部長）
- 4 議長選出 12 L丸山正彦さんを選出
- 5 書記ならびに議事録署名人の任命
 - ・書記に90 K澤柳信也さん、議事録署名人に5 K中村知史さん、20 K佐々木千加子さんを任命
- 6 議事
 - (1) 事業報告および会計報告の承認について
 - ・矢口会長より原案を説明。
 - ・伊東監事より会計監査報告・質疑応答は特に無く、全員
 - (2) 予算および事業計画について
 - ・矢口会長より原案を説明。
 - ・質疑応答は特に無く、全員
 - (3) 信州大学教育改善のための卒業生アンケートについて
 - ・矢口会長より原案を説明。
 - ・質疑応答は特に無く、全員
 - (4) 議事録署名人の任命
 - ・書記に90 K澤柳信也さん、議事録署名人に5 K中村知史さん、20 K佐々木千加子さんを任命
 - (5) その他
 - ・川田監事より、同窓会員の情報交換ツール、ソーシャル・ネットワーキングサービス「mixi」の一層の活用提案。
- 7 議長退任
 - ◎議長退任
 - ◎閉会（栗沢副会長）
 - ◎午後3時50分に閉会となる。
- 8 閉会（栗沢副会長）



会員のたより

玉田美治先生と フランス資本主義

幹事 横内 正雄
(1973年入学)

この夏、出版されることを諦めかけていた二冊の本が桜井書店から出版された。一つは玉田美治先生の『フランス資本主義』であり、もう一つは戸原四郎先生の『ドイツ資本主義』である。私は、一九七四年から五年間信州大学人文学部経済学科に通い、玉田美治先生のゼミに所属した。当時、先生は経済原論を担当し、宇野弘蔵『経済原論』をベースにした無駄のない文字通り原論体系を地で行ったような講義をされ、それに魅了されてゼミを希望したことを覚えてる。初めてのゼミでいきなりレポーターが割り当てられ、どうやっていいのかわからないまま大内力編著『現代日本経済論』の最初の章を必死に準備して一時間かけて報告した。先生からは「大内先生より長くなつたね」とのコメントをもらったが、それがいい意味なのか悪い意味なのかよくわからなかった。おそらく報告が長すぎてまとまりがない、ということだろうと理解した。

当時は両大戦間期の資本主義分析が一つの潮流となっており、多くの著作が出版されていた。中でも青木書店から出版されたつあった宇野弘蔵監修『講座帝國主義の研究』全六巻は、宇野理論による両大戦間期研究の里程碑になると期待されるものだった。玉田先生はそのうち第四巻『イギリス・フランス資本主義』のフランス編を担当していた。しかし、この巻がなかなか出版されず、そのうちイギリス資本主義が独立して第四巻として出版され、フランス資本主義は最後の第五巻に『ドイツ・フランス資本主義』として再編されてしまった。もともと完璧主義で筆が速いとは言えない玉田・戸原先生のことであり、まだ時間がかかるなというのが我々の印象であった。とはいえ、玉田先生が何も書かれていなかったわけではなく、先生の研究室にうかがった時には途中までの原稿のコピーとゲラをちよつと見せて下さった。当時の日本ではフランス資本主義の研究はほとんどなく、第一次大戦前までの記述だけで予定枚数のかなりを割いてしまい、肝心の両大戦間期の部分をコンパクトにまとめるを得なくてかなり苦労されていたようである。

卒業後、私は横浜国立大学大学院に進んだが、しばらくして玉田先生が病に倒れたと知らされ暗い気持ちになった。入院中

も、病院にお見舞いに出かけ、修士論文の構想に関するコメントをもらったり、博士課程の試験に合格しなかった時には「心配しなくていい。そこは私も受験したが落とされた」といつても慰められもした。一九八〇年三月ようやく東大の経済学研究所博士課程に編入することができて、東京女子医大に入院中の先生に報告にあがったが、その日は体調が悪くて面会できないと奥様に言われた。では東大に編入できただけお伝え下さい、と言って帰ろうとしたところ、そういうことならちよつとだけ会おうということになった。先生は手を握って面接では誰に会ったかと身振りで尋ねられ、相手の名前を答えるとうなずいてたいへん喜んでくださった。また来ますと言って別れたが、これが先生にお会いした最後の機会となった。その年の六月、実家からの電話で玉田先生が亡くなられたことを伝えられ、茫然としてしばらくは勉強が手につかなかつた。本棚に並んだ『講座帝国主義の研究』に第五巻が欠けているのを見るたびに残念な気持ちが繰り返しおそってきた。

しかし、東大で戸原先生の演習に参加して先生から玉田先生の原稿を引き継いでこれを原稿にするつもりだ、と聞かされた。何事も完璧を期す戸原先生のことなので、この本のためにフランス語の勉強を始めたという噂が院生の中で流れ、ますます現実性を帯びてきたように感じられた。とはいえ、戸原先生が多忙であったこともありなかなか出版は実現せず、半分忘れかけていたが、赴任した新潟大学で戸原先生と一緒に、先生がまだ出版を諦めておられなかったことを喜ばしく思うも、フランス・ドイツとも門外漢の私にはひたすら見守るだけの自分には忸怩たる思いが残った。その後、職場の同僚の藤澤利治先生から戸原先生がフランス資本主義の出版に取りかかっていると聞かされたが、直後に戸原先生が病に倒れ、一転暗澹たる気持ちになった。しばらく病氣療養に専念されて仕事はその後にと願っていたが、願ってもならず、戸原先生も亡くなられてしまった。

しかし、戸原先生は病をおして玉田先生の原稿を出版できる形にまとめ上げられ、残された部分は戸原つね子夫人と工藤章先生が仕上げ、戸原先生が担当するドイツ資本主義も工藤先生と藤澤先生が既発表の原稿をつなぎ合わせて出版にこぎつけたのであった。企画から三十年以上たつて『講座帝国主義の研究』は完結を見たのであった。戸原先生をはじめ関係者のご努力の賜である。さらに、ここには出版を担当した桜井書店の桜井香氏がかつて『講座帝国主義の研究』の編集担当者であったという奇跡的な巡り合わせが介在していた。

この二つの本を手にして研究者としての駆け出しの頃のことを懐かしく思い出している。本の内容について書く紙幅はもはやないが、この本の奥付を見て愕然とした。玉田先生が亡くなられたのは四十八歳の時であった。今の自分はまだもうすでにその年齢を超えてしまっている、という驚きである。ゼミのコンパで私たちの年齢を聞いて「君たちは僕の子とも言うていい年齢なのか」と自分の年齢に愕然としていた玉田先生を思い出したが、私自身は師と仰ぐ先生の年齢を超えたにもかかわらずその足下にも及ばない。師は永遠に師である。「青年老いや早く学成りがたし」とはよく言ったものである。最後に、あらためて玉田美治、戸原四郎両先生のご冥福を祈りたい。

私の近況報告

幹事 小林 秀視
(1979年入学)

ここ数年の私の一年のライフサイクルは「スキー」を中心に回っています。本格的にスキーをやり始めたのは三十歳過ぎからで、最近の一シーズンの滑走日数は三十五日前後になります。気持ちよくスキーに専念できるように、春(といってもゴールデンウィーク明け)から秋(といっても十一月中旬まで)にかけては家庭サービスに徹し、ある程度の体力づくりをしながら日々を過ごし、シーズン到来とともに、毎週末スキー場へと足を運ぶのです。本当は平日も山へ行きたいのですが、仕事がある(特に冬場のほうが忙しい)ので、そこは我慢して、集中して仕事を早く仕上げ、間違っても休日出勤などという最悪の事態を招かないように調整しておきます。

さて、土日は前夜いくら深酒しようとも、不思議と早く目が覚めます。そして、支度をして自宅から三十分程度の距離にあるスキー場へと向かい、朝一のきれいに整地されたバーンを何本か滑るのです。天気が良いときは、北アルプスを始めとして遠くにはかすかに富士山までが見え、この絶景を見るたびにとても満たされた気分になります。

私は地元のスキークラブに所属しており、必然的にスキー学校にも所属しているので、早朝の何本かを楽しんだ後は学校へ集合し、ミーティングを経てその日の分担が決まります。通常は入校者のスキーレッスンが主ですが、大会時の旗門員やコース整備等の役をしたり、バジレットの手伝いをしたりもします。私個人としては、スキーレッスンが一番好きですし、やりがいを感じています。私ごときの指導を受けて、「うまく滑れるようになりました」「スキーが楽しくなりました」などの感謝の言葉をいただく、本当に嬉しくなります。バブル期のスキー学校は、放っておいても客が来ていたので、サービス面では？でしたが、スキー人口が最盛期の半分以下に減少し、どこのスキー場でも危機感をもっている昨今では、サービスもかなりの向上していると思えますので、

スキーを止めてしまっている皆さんも、是非今シーズンはスキー場へ行ってみたら如何でしょうか。

ところで、私の今シーズンの目標は「指導員検定合格」です。実は、昨年受験して不合格だったのです。検定は学科試験と実技試験八種目で行われ、私の場合、実技で二種目落としてしまいました。この指導員検定は一年に一回しか行われませんが、合格科目(単位)は三年間有効なので、翌年受ける実技種目は少なくて済みます。今回は、弱点を克服できるよう滑り込んで再度検定に臨むつもりです。

最後に、今よりもはるかに時間之余裕のあった信大生時代にもっと真剣にスキーに打ち込んでいたら、今の自分はどうなっていただろう……ひよつとしたらデモンストレーターになっていたりして……などと、とても実現しそうにない戯言を述べて、私の近況報告を終わりにします。

遠きにおいて思ふもの

幹事 佐々木千加子
(1985年入学)

「ふるさととは遠きにおいて思ふもの。そして悲しくうたふもの」

この後に詩が続くのかこれで終わるのかさえも恥ずかしながら知らなかつたが、信州大学に採用が決まって、なぜかふと思いついたのが室生犀星のこの詩の一節であった。考えるに、ふるさとを母校に置き換えていた

のかもしれない。大学にいることを日常とするよりも、学生時代は遠い思い出にしておいたほうがいいような気がする。

卒業してすぐ就職した流通系企業に十ヶ月ほどお世話になり、公務員になるかと職を辞して試験準備を始めた。運良くその年の試験に受かり、いくつか官庁訪問をして結局母校信州大学の事務職員に採用されたのが平成三年のことである。医学部を振り出しに現在では人文学部で主に留学生に関する仕事をしている。経済学部配属されたことはなく、意外と経済学部のことはよくわかっていない。

十五年ほど大学職員として過ごした間に大学は大きく様変わりした。教養部はなくなつて、そのかわり現在は全学教育機構が主に一年生に対する教養教育(と聞いていいのか)を行っている。私の在学中は経済学科のみであった経済学部も経済システム法学科が増え、法科大学院も設置された。人文学部と共有の新しい校舎も建つた。

一年生の時に最後に座っていたのに私語を注意された、教養で一番大きい階段教室の二十番教室は今も健在であるが、その下にあった教室は既になく現在では学生支援センターとなっている。「体育の授業でスキーに行くことになっているので追試が受けられませんが、なんとかありませんか。」と半べそで懇願しレポート試験にしてくださいました。先生もすでに定年で退官されたゼミの指導教官であった下田平

先生もこの三月に定年退職なさっている。

大学は、昔と変わらぬたたずまいを残しながらしかし、そこに集う学生、教職員、大学のシステムは変化を遂げているし、これからも変わり続けていくだろう。大学全入時代に突入し、信州大学のどんな魅力アピールしていくことができるのかを今、すべての大学構成員が知恵を絞って実行していかねば、生き残りさえ危うい。卒業生の皆様方にも是非暖かくそして厳しく母校を見守っていただき、時には率直なご意見を寄せていただくことが本場に必要なことだと思ふ。

今どきの若い子とは、とかく言われがちだがそんなことはない。確かに予想外の行動や言動に驚かされる子たちもいる。しかし「よくやっているなあ」と感心させられる学生も間違いなくいる。その一方で傷ついて入学してきたのかなと思わせる学生も気になる。入学式の当日に「転学したい」と言ってくる学生。受験勉強のために休学したいと言ってくる学生。特に一年生に関しては、四月は慣れない環境に適応しきれないのか、授業中に過呼吸の発作で学生が苦しんでいるとか、倒れたので早く来てほしいと呼び出されることなどが、ここ二、三年は本増えに増えた。車椅子は学務の必需品である。せっかく大学生活が始まっても素直に喜べない、ここ信州大学で過ごすことに空虚さを感じながら歩き始める学生の

後姿が、生協前広場で新しい友達へぎこちない笑顔としぐさで話しかけている様子の向こうに時折透けて見える気がする。もちろん、大学生生活を謳歌している学生たちも大勢いるけれど。

たとえ風景が昔と変わってはいなくても、そこを歩く自分は決して昔と同じ自分ではなく、過ぎ去った学生時代をさらに後ろへうしろへと見送る日々を最近実感するようになった。社会人になって二十年近く経ち、自分を振り返る時期が来たからかもしれない。かつて自分たちがしていたように笑いざめきながら歩く学生たちは、まさに今をここ信州大学で精一杯生きていくリアルな学生たちであり、ときおり彼らのことを「一体何を考えているのやら」とため息混じりで見ている自分に苦笑したり、天気の良い日に真っ青な空を背景に構内を歩いている学生たちがひどくうらやましく思えて、そんな自分をもてあましたりもしている。そう、「悲しくうたふ」とはこういうことなのかと思ひながら。

信州松本

我が心の故郷

監事 川田 智弘
(1987年入学)

卒業してから、気が付くとはや十四年が過ぎました。就職で移り住んだ伊那にも慣れ親しみ勤務先では『中堅』と呼ばれる年代に入っています。妻子と住宅ローンを抱え、日々の仕事に

精を出す典型的なサラリーマン生活を送る毎日です(苦笑)。

そんな自分にとって信州松本の地は、今も実家のある東京・府中と並ぶ『第二の故郷』です。卒業した一九九三年の春から現在までジョッピングその他で訪れ、特に長野冬季五輪が開催された一九九八年の春までは、在学中に入会した松本スキークラブ(現・松本市スキークラブ)の活動に参加する為に幾度となく伊那谷から善知鳥峠を越え、松本平へと足を運んでいました。時折『いつそ再び松本に居を移した方が良いのでは?』と自問した事も、一度や二度ではなかった記憶が……。一九九五年に結婚した妻にとつては『馬鹿げた考え』以外の何者でも無かつただろう、とは思いますが……。

しかし、自ら望んで長野五輪へ競技役員として県スキー連盟から派遣される事になり、上司に『退職も辞さない姿勢』で交渉し勝ち取った一週間の休暇をもつて、この『松本詣』は縮小の途を辿る事と相成りました。仕事が多忙を極める中、自宅の新築や妻の出産等もあり、一九九八年の春から二〇〇三年の秋までは特別な用でない限りは松本の地を踏む機会もあまりなくなりなりました。そんな時、前同窓会長である伊東監事からお誘いを頂いたのをきっかけとして、二〇〇四年の同窓会総会から経済学部同窓会の役員としての活動が始まりました。

そんな頃と歩調を合わせるか

の様に、二〇〇四年の秋から『松本市にJリーグチームを』というスローガンの下、松本青年会議所では有志主導によるプロジェクトが始まりました。一九八五年、W杯メキシコ大会に日本代表があつた一歩まで迫つた。奇跡の国立競技場超満員と伝説のフリーキック。以来のサッカーファン(応援する方)でもあり、二〇〇二年W杯時に行われたパラグアイ代表松本キャンプ時にも後援会員となつて松本平広域公園総合球技場『アルウィン』にも足を運んでいた自分にとって、この衝撃はたいへん大きなものでした。翌二〇〇五年、『行くぜ、信州からJ!』との謳い文句と共に、四十年という長い伝統のある松本市のアマチュアチーム『山雅(やまが)』サッカークラブがJリーグを目指す『松本山雅フットボールクラブ』として、アルウィンホームスタジアムとしてリスタートを切りました。以来現在まで、自分はこのクラブのいわゆる『コア・サポーター』の一人として、余暇時間を可能な範囲でこのクラブのサポートに充てる日々を送っています。

こういつたトピックが重なり、二〇〇四年秋から現在までの『松本詣』の回数は、一気に卒業直後の時期と同じ位の頻度となりました。もちろん、仕事と家族との兼ね合いを取りながらではあるのですが……。今後同窓会では諸先輩や後輩と連携しつつ、先生方や事務局にご協力を頂きながら『同窓会活動

の活性化」という大命題の具体化に向けて、微力ながら少しずつでも協力していく所存です。また、信州初のプロスポーツ球団を目指す黎明期である松本山雅FCに対しサポーターとして試合での応援や松本平地域及び伊那地域での宣伝活動等、できる協力を継続していきます。同窓生の皆さんには、今後とも同窓会の活動へのご理解とご協力をお願いいたします。また、多感な時期を過ごした思い出の地をホームに日本サッカーのトップリーグを目指す、このクラブの名前を是非とも覚えておいて頂けたら幸いです！

今、学生時代を振り返って思うこと

幹事 長島加代子
(1992年入学)

早いもので信州大学を卒業して十年になりました。四年間慣れ親しんだ松本を去り、地元で就職してからは、日に日に当時の楽しかった学生生活の思い出が遠いものとなり、最近では「懐かしい」と思えるようになってきました。大学時代はお世辞にも「真面目に勉強していた」とは言えませんが、自然豊かな環境で、人生の宝となるような友人や恩師と出逢えたことは私にとって非常に大切な時間だったと、十年経った今でも思っています。

サークル活動やアルバイト生活は、今となっては貴重な経験でしたし、学部内では、当時女

子学生比率の高かった金ゼミで同級生だけでなく、先輩・後輩とも幅広く交友を持たせて頂き、今でもお付き合いは続いています。金ゼミでは、授業だけでなく、ゼミ終了後の飲み会や乗鞍でのゼミ合宿、仲間たちと温泉を目指してドライブなど楽しかったことが次から次へと思い出されます。

当時はただ「楽しい」としか思っていなかったそれぞれの出来事、社会に出て働くようになって「とても貴重な」と感じることになったのは、ここ二、三年のことです。私は現在、国内旅行に関係する仕事をしていいますが、旅には人それぞれの形があり、感激するポイント、一緒に旅した人との共感など様々な思いが重なって「旅の思い出」となります。

もともと旅行好きだったので、今まで色々な所に行きましたが、強烈に思い出すのは学生時代、お金を節約して青春十八きっぷで旅した四国めぐりだったり、志賀高原のハイキングなどです。感動したことというのは、時間がたつても、実感としてすぐく自分の中に残されているし、今自分の仕事をやる上でも「感動を人に伝える」ためにどれだけ多くの経験が役に立っているか計り知れませんが、勉強も人間関係も遊びも、その時、その時代にしかならない経験です。過去に縛られる必要はありませんが、経験を生かすという意味で、私の大学生活はどのシーンを思い出しても必要なことだったよ

うな気がします。もちろん、今の生活の中での経験は、今後役に立つ日がきつと来ると信じています……。

二〇〇六年一月、金ゼミの先輩方が、現在の仕事について、学生たちに講義すると聞き、私も経済学部にお邪魔しました。真剣に話を聞いている学生たちを見て羨ましく思い、またそれぞれの職場で活躍されている先輩に対しても羨ましく感じました。自分の経験を大切にしながらも、好奇心を持って見聞を広げる……それは学生の頃に抱

いていた思いと結局は同じなのですが、改めて大事にしなければいけないことだと認識した瞬間でした。

まだまだ自分を成長させるべく、過去を振り返ってばかりはいられませんが、松本で四年間、学生生活を送れたことには心から感謝しています。そして、多くの友人に出会えたことにも、同窓会の皆様や、今まさに貴重な体験をしているであろう学生たちが、私と似たような思いを抱いていらつしやれば嬉しい事と思ひ、筆をとらせて頂きました。

信州大学東京同窓会の開催について

文理学部の諸先輩方により毎年開催されている、信州大学東京同窓会が、今年も左記により開催されるはこびとなりました。つきましては、東京近郊にお住まいの会員の皆様方で、ご都合がつかれます方の積極的なご参加をお願いいたします。

信州大学経済学部同窓会 会長 矢口晋司

記

日時 平成19年2月3日(土)
午後2時30分受付開始

場所 アルカディア市ヶ谷 4階 鳳凰の間

内容 J R総武線 市ヶ谷駅から徒歩2分

(一) 記念講演 丹羽 公雄 名古屋大学大学院教授

(二) 信州大学の近況と課題 小宮山 淳 信州大学学長

懇親会 白井 汪芳 信州大学理事

その他 記念講演および懇親会ご出席の方は、同窓会事務局までメールまたは電話(火、木の10時~15時)でお知らせください。(メールアドレス、TELは一面参照のこと)

編集後記

二〇〇六年も、はや師走である。本第三号の年内発行によって、会報の年二回発行という理事会決定が実現した。ひとえに玉稿をお寄せくださった会員(先生方も会員!!特別会員)の皆様方のご尽力ご協力によるものと感謝申し上げます。

今年は総会が秋・文化の日におこなわれ、総会の毎年開催も承認された。そのあとの懇親会は、酒も入って楽しいホーム・カミング・デーとなった。来年度の文化の日にも多くの会員にご参加いただきたい。

本号は、社会人大学院特集とした。社会人大学院で学ぼうという気運がある。中身はどのようなものか、関係の先生方や修了生の方に書いていただいた。信州大学の地域イニシアティブ・コースと経営大学院は、それぞれ、中身の点でも、社会人を主たる対象とし夜間や土曜日に開講している点でも、全国的にユニークである。会員のなかにも、これまでの社会人としての職業経験をふまえて、問題意識をもって、あらためて学んでみたいと思っている方が少なくないのではないか。是非、問いをもつて学の門をたたいていただきたい。

会長の案内のとおり、旧文理学部の諸先輩を中心にした信州大学東京同窓会が毎年開かれている。さまざまな刺激を受ける異業種交流の場でもある。是非ご参加いただきたい。(事務局)